

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

傲慢な画家と詩人 18

世紀後半のロシア喜劇におけるスマローコフ像

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-01-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平嶋, 寛大 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2677">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2677</a>

## 傲慢な画家と詩人

### 18世紀後半のロシア喜劇におけるスマローコフ像

平 篤 寛 大

#### 要旨

В данной статье рассматривается изображение А. П. Сумарокова как предмета насмешек. Например, в письме В. К. Третьяковского пародией на него является высокомерный художник А. Ф. Суффенов, в комедии В. И. Лукина «Щепетильник» (1765) – гордый поэт Самохвалов, а в произведении Н. П. Николева «Самолюбивый стихотворец» (1779) – Надмен.

В данных источниках первый комедиограф России изображается как носитель пороков – упрямства и самолюбия. И письма к Сумарокову также подтверждают этот факт. По ним можно понять, как воспринимали Сумарокова его современники и как он воспринимал их. Смотри на «Письмо русского молодого вельможи» А. П. Шувалова (1760), «Письмо неизвестного к А. П. Сумарокову» (1769), мы видим, что его современники знали вспыльчивый характер последнего, и считали произведения Сумарокова подражанием заграничных литературных произведений.

С другой стороны, письма самого Сумарокова показывают, что он считал себя равным великим французским писателям – Расину, Корнелю и т. д. Однако, учитывая то, что с конца 1760-х гг. он начал просить помощь от императрицы Екатерины II, можно сказать, что на закате жизни он страдал от недостатка денег и признания.

В конце статьи автор отмечает, что пьяный художник Сгорепьянов в комедии А. И. Клушина «Алхимик» (1793) похож не только на Скородумова, речь о котором велась в предыдущих исследованиях, но и на Сумарокова. В этом произведении Сгорепьянов разочарован из-за недооценки в России и не может прекратить пить. Как и Сумароков, он уподобляет себя древнегреческим художникам.

В данной статье прослеживается процесс, в ходе которого Сумароков, высмеивавший своих оппонентов в комедии, сам стал объектом насмешек в истории русской комедии. Его жизнь напоминает нам о порочных персонажах из «слёзной комедии». В них добродетели в беде становятся счастливыми, а порочные

герои впадают в несчастье. Из-за высокой самооценки Сумароков потерял славу, связанную с литературным искусством, и постепенно превратился в олицетворение порока – самолюбия. Одним словом, насмешник превратился в посмешище.

## はじめに

ロシア演劇において最初に喜劇を執筆した А. П. Смароковは、自身の喜劇において同時代の作家を辛辣に嘲笑している。特に、В. К. Трезьяковスキーをモデルとした喜劇『Трезичиус』《Тресотиниус》(1750) は、論争を巻き起こした。しかし、Смароковが他者を嘲笑したように、非常に傲慢かつ狷介な人物であったСмароковもまた嘲笑の対象となった。Трезьяковスキーは、自身の『手紙』《Письмо》(1750)の中でСмароковの『Трезичиус』の作風をパロディし、彼の無学と傲慢を嘲笑している。また、В. И. Лукинは、喜劇の序文や劇中で舌鋒鋭くСмароковを非難している。Н. П. Николевは、Смароковの傲慢な性格を戯画化した登場人物を自身の喜劇に登場させている。

本稿では、嘲笑の対象となったСмароков像を検討する。特に、Трезьяковскийによる『Трезичиус』のパロディの断片、Лукинの喜劇『小間物商人』《Щепетильник》(1765)におけるСамуилヴァーロフ、ニコレフの喜劇『思いあがった詩人』《Самолубивый стихотворец》(1779)におけるНадоменを俎上に上げる。次に、実際のСмароковはどのように評価されていたのか、Шуваловの『ロシア人青年貴族の手紙』《Письме молодого русского вельможи》(1760)、作者不明『匿名のСмароков宛の手紙』《Письмо неизвестного к А. П. Сумарокову》(1769)、その他のСмароковの書簡を基に考察する。Смароковが同時代人にどのように認識されていたのか、そして、そして彼が周囲の態度をどのように感じていたのかをまとめる。最後に、А. И. Клушинの喜劇『錬金術師』《Алхимист》(1793)に登場する酔っぱらいの画家Сгарепьяーノフには、これまで指摘されていたスコロドゥーモフというモデルのみならず、Смароковも投影されていたことを指摘する。喜劇で論敵を嘲笑する強情で狷介な作家であったСмароковが、ロシア喜劇史の中で自身が嘲笑の対象となっていく過程こそ、催涙喜劇の悪徳を有する劇人物が辿るものと同様であることを本稿では明らかにしたい。

なお、本稿におけるロシア語訳は拙訳であり、訳を参照したものは脚注に記してある。

## 1. トレジアコフスキー『手紙』におけるアルヒソトラシュ・フィラフトノヴィチ・スフェーノフ

トレジアコフスキーは、『トレソチニウス』において自身が笑いものにされたため、その反論として『手紙』を執筆した<sup>1</sup>。『手紙』の中で、スマローコフの嘲笑に対して徹底的に反論をしていたが、最後の追伸においてはスマローコフの喜劇のパロディし、嘲笑し返している。

このパロディに登場するのが、アルヒソトラシュ・フィラフトノヴィチ・クリヴォバエフ Архисотолаш Филавтонович Кривобаев である。トレジアコフスキーは前述の反論の中で、アルヒラシュ・アルヒロヒチ・スフェーノフ Архилаш Архилохич Суффенов という三流喜劇作家を痛烈に悪罵しており、さらに「おそらく、このアルヒラシュ・アルヒロヒチ・スフェーノフがこの世にいて、もしうぬぼれた詩人でもあったなら、彼は古代のスフェンからスフェーノフと呼ばれているのだろう<sup>2</sup>」と述べている。したがって、喜劇のパロディに登場するうぬぼれた画家アルヒソトラシュ・フィラフトノヴィチ・クリヴォバエフと、批評に登場するうぬぼれた詩人アルヒラシュ・アルヒロヒチ・スフェーノフは同一人物である。なぜ別々の名前で文敵に言及したのか。それは、アルヒソトラシュ・フィラフトノヴィチ・スフェーノフ Архисотолаш Филавтонович Суффенов としてしまうと、アレクサンドル・ペトローヴィチ・スマローコフの頭文字と同一となり、名誉を毀損したとの非難を受けてしまうためであろう。

さて、『トレソチニウス』のパロディにおいて、画家であるクリヴォバエフは、自分が結婚の絵画を描くための野心（『手紙』の中では、амбиция という外来語が用いられている）があるのかと尋ねる。ボベンビウスが野心は柔和な心にとって害になるものであり、質問の言葉を変えるべきだということ、アルヒソトラシュはさらに反論する。

**アルヒソトラシュ:** あなたはまさに哲学者然としていますね、というのも、全てを一行おきに話しているからです。私は皆と同じように話しています。真実を申せば、もし野心が無いというなら、世間知らずか本物の馬鹿でしょう。私は大なり小なりしゃれ男の作法を知っています、フランス風ではありますが。そのため、野心がないのなら、そういうことでしょう。なぜなら、野心であって野心でないからです。ええ、野心とは明らかな野心で

<sup>1</sup> Гринберг, М. С., & Успенский, Б. А. (1992). Литературная война Третьяковского и Сумарокова в 1740-х – начале 1750-х годов. *Russian Literature*, 31(2), 133–271.

Берков П.Н. Ломоносов и литературная полемика его времени 1750-1765. — М., Л.: АН СССР. 1936.

<sup>2</sup> Ранчин А. М., Корвин В. Л. Критики XVIII века. М., Олимп, 2002. С. 89.

あり、それ以外に呼びようがないのです<sup>3</sup>。

野心の重要さを説くクリヴォバエフは、他の登場人物にたしなめられて、怒りながら退場する。「なんだって？君らはみんなして私を馬鹿にしているのか！いや、画家を馬鹿にして、市場の人間も馬鹿にしているのだ！おしゃべり屋の絵を描く人を馬鹿にしているのだ！」という彼の最後の台詞は、彼の性格を非常に端的に表していると言えるだろう。つまり、彼は自身の絵画に情熱を抱き、自尊心が強すぎるあまりに、他人からの嘲笑に簡単に憤慨してしまうのである。

文芸に対して人一倍情熱を注いでいたスマローコフは、その狷介な性格ゆえに、それは周囲の人間からすると迷惑な人物であり、衝突も避けられなかったのである。さらに、スマローコフに対して否定的な感情を抱いていたのは、1760年代から1770年代の劇作家たちも同様であった。

## 2. ルキンの喜劇におけるスマローコフ＝サマフヴァーロフ

### 2.1 『愛によって心を入れ替えた道楽者』の序文におけるサマフヴァーロフ

В. И. ルキンは、喜劇『愛によって心を入れ替えた道楽者』«Мот, любовью исправленный» (1765) の序文において、作家が喜劇を執筆する目的を3点挙げている。第一に名誉欲、第二に金銭欲、そして、「第三の目的は、時として誰かに対して抱かれる嫉妬、悪意、復讐心を満たすため、もしくは、他人の幸福が我慢ならないという生まれつきの親類への憎しみのゆえに、純粋な美徳を言葉と文字によって害するためである」という。スマローコフ以外の喜劇に風刺要素が認められないとの理由で、П. Н. ベルコフは、第三の目的は А. П. スマローコフのみに向けられたものであるとしている<sup>4</sup>。実際、ルキンは、第三の目的で作られた作品、つまりスマローコフの作品は「心に思い描くことすら罪と思えてしまうほど嫌悪感を催す<sup>5</sup>」ものであると述べている。

ルキンは、スマローコフをサマフヴァーロフという名前で、喜劇『愛によって心を入れ替えた道楽者』の序文、喜劇『小間物商人』において登場させている。このどちらにおいても、サマフヴァーロフは非常に傲慢な人物である。そして、前述したような作品に対する忌避感のみならず、サマフヴァーロフ自身も嫌悪感を抱かせる人物であり、多作なだけで文学的才能は無く、若い作家たちの成長の芽を摘むだけの存在として描写されている。

<sup>3</sup> Там же. С. 107.

<sup>4</sup> Берков П. Н. История русской комедии XVIII в., М. Л., АН СССР, 1977. С. 32-33, 80

<sup>5</sup> Лукин В. И., Ельчанинов Б. Е. Сочинения и переводы Владимира Игнатьевича Лукина и Богдана Егоровича Ельчанинова. СПб., 1868. С. 6

サマフヴァーロフはこう述べた：「ルキンも喜劇を作ったと耳にするのは滑稽なことだ...ああ！そういえば、彼も放蕩者だったか。それなら、我々はデトゥーシュ氏の放蕩者のひどい翻訳を目にすることになる、いくつかの個所が台無しになって」。しかし、どうやら彼の自尊心はお忘れになっているようだ、最も醜い翻訳が、殴り書くことしか覚えてこなかったせっかちな彼の筆と手による作品であることを。彼は自分が毎日耳にしていることを忘れるべきではないだろう、町中が彼の作品について睦まじく評価しているのだから。しかし、町全体が彼を評価しているのだ。彼は世界全てが何も知らないのだと考えていた方がましのだ、自分の作品を創作ではなく、殴り書きだと認めるよりも。なぜなら、彼は、たとえ小さな過ちがあろうとも、創作する能力がないからだ。簡単に言えば、私に対する様々な中傷者はいたが、彼らのうちにいるのは、私の放蕩者を読んでいないがため、私を全く知らないがため、この作品に反対しているのだ。我々の文学に対する上辺だけの高圧的な裁判官は、私が五幕喜劇を勇気をもって作り、それを若い人々に伝播させたとして私を町から追い出す判決を下した。もし喜劇が成功を収めれば、それは私の作品だからではなく、エラーギン殿のものであることの証明だと決めつける人々もいた。これによって、彼らはこの喜劇を否定し、他人のものを自分の名前で世に出したペテン師に私を仕立て上げることを何よりも望んでいた<sup>6</sup>。

ルキンは、外国喜劇の単なる翻訳ではなく、ロシアの社会と風土へと換骨奪胎した翻案を提唱するなど、ロシア社会にとっての文学の有用性を説いていた<sup>7</sup>。そして、そんなルキンにとって、傲慢で他者を見下すような性格のスマローコフはまさに障壁であった。実際、スマローコフが自身の喜劇の失敗について言い訳じみたことを述べていたことは、彼自身のエカテリーナ二世への手紙から推察できる。1770年1月28日にエカテリーナ二世へ宛てた手紙の中で、スマローコフは自身の劇作品が芳しくなかった理由を俳優の怠慢だとしている<sup>8</sup>。一方で、自身はロモノーソフやトレジアコフスキーの作品を批評するものの、自身の批評に対しては反駁をする、さらに喜劇の中で論敵を嘲笑するとあつては、文壇の中でスマローコフは傲慢であるという雰囲気も形成されても致し方ないところだろう。

ルキンは『愛によって心を入れ替えた道楽者』の序文の最後で次のように述

<sup>6</sup> Там же. С. 13-14.

<sup>7</sup> Письма русских писателей XVIII века. Л., Наука, 1980. С.110-119

<sup>8</sup> Там же. С.126-127

べている。

この序文を終えるにあたって、私に残されているのは読者全員に納得してもらおうことである、私が放蕩者を書いたのは、同国人を風刺で傷つけようとしたためではなく、ただその利益のため、彼らに純粹に満足してもらおうためである。人物や表現をふしだらに解釈し、私への怒りを募らせるために自身の知り合いに対して屁理屈を垂れるために、多くの人々があら捜しをしていることを知っている。しかし、私は、その努力が無駄なものであると彼らに保証しよう<sup>9</sup>。

このようなスマローコフの態度を見ていたからだろうか、ルキンは自身の作品の完成度と有用性を前面に押し出すと同時に、その拙い面についても述べている。ルキンと同時代の作家エリチャニーノフも、自身の喜劇『罰せられた軽薄女』«Наказанная вертопрашка» (1764) において、自身の喜劇作品の幼さを大目に見てほしいという謙虚な序文を載せている。スマローコフという多作で多弁な作家が活躍を始めて十数年、喜劇というジャンルにおいて彼に対抗する人物たちが現れ始めたのである。彼らが自身の粗さを認めながらも、スマローコフとは違う方向性の喜劇を創作し始めたことで、ロシア喜劇はさらなる発展を目にするのである。

## 2.2 『小間物商人』におけるサマフヴァーロフ

『小間物商人』におけるサマフヴァーロフはどのような人物なのだろうか。もちろん、スマローコフに対して強い嫌悪感を抱いていたルキンは、『小間物商人』の劇中においてもサマフヴァーロフを傲慢な作家として描写している。彼は、自身の作品を過大に評価し、ロシア人作家と彼らの作品を軽蔑している。

ここで私の作品の長所を理解できるものは一人もいない。

おそらく、君は文学を知らないのだろう。我々の言語で何が読み切るのに耐えうるというのか？

そうだとも、しかし、これは勉学のためではない。私は誰のもとでも学ばず、つまり、誰の真似もしないが、私はいく人かの外国作家を自分と同等だと見なしている。今や、自分の芸術をこれ以上見せようとして、書いてはいないのだ。

今や、我らが祖国にとって恥なことに、多くの作家が現れている、特に、

<sup>9</sup> Лукин В.И., Ельчанинов Б.Е. Сочинения и переводы Владимира Игнатъевича Лукина и Богдана Егоровича Ельчанинова. СПб., 1868. С. 15.

読み書きも知らず、時としてその作品を耳にしなければならないような喜劇作家が、だ。

なぜなら、人は良きものを書かねばならないが、ここでは誰もが非常に汚らわしく創作し、翻訳していることを、私はもうあらかじめ知っているのだ<sup>10</sup>。

サマフヴァーロフに対する「何の役にも立たないガラクタを除いて、何も書いていないし、翻訳もしていない」という商人の言葉は、『愛によって心を入れ替えた道楽者』の序文のサマフヴァーロフと同一人物であることを示している。自身を外国の大作家と比肩するとみなすほど傲慢であるが、その作品はただの落書きであり、そこに理念も思想もないと、ルキンは見ているのである。

また、喜劇『小間物商人』の序文、そして『報われた忠誠』*«Наказанная вертопрашка»* (1764) の序文において、ルキンは喜劇の外国要素を非難している。この外国要素は、ロシア人が喜劇における悪徳を知覚し、改めようとすることを阻害しているのだと。この外国要素とは、ルキンが述べているように、外国人風の名前である。この外国要素を有していたのは、当時の翻訳家たちのみならず、1750年に喜劇を作ったスマローコフも同様であった。

このように、ルキンは自身の作品において、スマローコフ作品の粗雑さと外国偏重、そして、スマローコフ自身の傲慢さを厳しく批判していたのである。

### 3. 喜劇『思いあがった詩人』

喜劇『思いあがった詩人』は、ニコライ・ペトローヴィチ・ニコレフ Николай Петрович Николев (1758-1815) によって1779年に書かれた喜劇である。彼の作品では他にもコミックオペラ『ロザーナとリューブム』*«Розана и Любим»* (1776) や喜劇『物は試し、または成功した試み』*«Попытка не шутка, или Удачный опыт»* (1774) などが知られている。しかし、『思いあがった詩人』の最も興味深い点は、自分の文学的才能に盲目的なまでの自信を持っているこの喜劇の主人公が、「ロシアにおける風刺喜劇というジャンルの開拓者—スマローコフ<sup>11</sup>」の描写であるという点である。

Г.А. グコフスキーは、ニコレフは『思いあがった詩人』においてもスマローコフの喜劇の規範を遵守していたのだと述べている。「実は、この喜劇の初演はスマローコフの死後の1781年である。しかし、ここで重要なのは、ニコレフが

<sup>10</sup> これらの台詞は、『小間物商人』の18場の台詞である。(参照：Лукин В.И., Ельчанинов Б.Е. Сочинения и переводы Владимира Игнатьевича Лукина и Богдана Егоровича Ельчанинова. СПб., 1868. С.220-222)

<sup>11</sup> Берков П. Н. История русской комедии XVIII в., М. Л., АН СССР, 1977. С. 169



スマローコフについて喜劇で触れていたのは彼の人格に関してのみであるという点である。スマローコフの著作にも、彼の世界観にも一片の疑念はない。しばらくして、ニコレフはあらゆる方法でスマローコフの作品を称賛している。さらに、彼は頌歌、諷刺、抒情的恋歌、そして悲劇において忠実なスマローコフの弟子であり、おそらく他のすべての弟子よりも忠実で従順であった。「ここで、部分的な逸脱はあったとしても、ニコレフの創作の基礎には常にスマローコフの詩的表現の規範とスマローコフの文体があった。政治観について言うならば、ニコレフはその文学活動のまさにその時期、1770年代終わりから1780年代において、クニャジニンとともに、その共通の師よりも非常に急進的であった<sup>12</sup>」。

しかし、ベルコフおよびスチェンニクは、これはスマローコフへの忠誠ではなく、正反対のパロディであるとしている。

「筋の構成と創作方法において明らかに目新しい点はないものの、『自尊心の強い詩人』は、古典主義の大家とその文体に対して全体的にはっきりと反対の立場を示すという作品としての斬新さの十分な特徴を有しているのである<sup>13</sup>。「ロシアのパルナツスを汚し、彼の功績を認めない無能な人間たちに向けられたナドメンの非難の言葉は、スマローコフの風刺やたとえ話を思い起こさせるものであり、この喜劇の作者は彼を明らかにパロディ化しているのである<sup>14</sup>」。

加えて、ニコレフが師を揶揄する喜劇を執筆した1775年当時、スマローコフがエカテリーナ2世と政治的に不和であった点から、文学的理由だけでなく、社会的理由も含まれているのではないかとベルコフは指摘している<sup>15</sup>。スマローコフの詩作や文体を模範としながらも、社会的背景からスマローコフの人格を貶める作品を書かなければならなかったニコレフは板挟みの立場に置かれており、スマローコフが没するまで作品を舞台にあげないことでこの状況を切り抜けようとしたのではないかと推察される。

では、この喜劇において、ナドメンは実際にどのように描写されているのだろうか。

<sup>12</sup> *Гуковский Г. А. Русская литература XVIII века. М., Гос. учеб.-пед. изд-во Наркомпроса РСФСР. 1939. С. 374-375*

<sup>13</sup> *Стихотворная комедия конца XVIII – начала XIX века.: М. Л., Советский писатель. 1964.. С. 7-8*

<sup>14</sup> *Стенник Ю. В. Русская сагира XVIII века. Л., Наука. 1985. С. 178*

<sup>15</sup> *Берков П. Н. История русской комедии XVIII в., М. Л., АН СССР, 1977. С. 170*

### 3.1 喜劇『思いあがった詩人』におけるナドメンの描写

ナドメンの人物像を考える前に、喜劇『思いあがった詩人』の梗概を紹介しておく。

娘ミラーナとの結婚の承諾をもらおうと、青年チェスナドゥームが傲慢な詩人ナドメンのもとを訪れることで幕が上がる。しかも、作家であるナドメンに自作の悲劇を見てもらおうと考えている。ナドメンはというと、自身の詩作に集中できないがために、同じくミラーナに求婚する軽薄男モーストリフにも、正論を吐くチェスナドゥームの父親クルトーンにも苛立っている。皆の心配をよそに、チェスナドゥームはナドメンに悲劇を見せてしまい、彼を激昂させてしまう。絶望的な状況の中で、女召使マリーナは一計を案じる。ミラーナがモーストリフを誘惑し、彼にスマローコフを称賛させ、そして、チェスナドゥームの悲劇をモーストリフ作として見せる、というものである。計画通りに勘違いさせられたモーストリフは、自身の軽薄さを遺憾なく発揮してしまい、女性2人に冷笑され、ナドメンにも悪罵され、すごすごと逃げ出してしまう。ナドメンは、唾棄すべき軽薄男よりも誠実な方に娘を嫁がせようと言い、文学をこれ以上書かないことを条件にチェスナドゥームとミラーナの結婚に同意する。他人の結婚など眼中にないナドメンにとって最大の関心事は、自身の詩作と、文壇の質の低下であった。

作品において、ナドメンは常に詩作についてのみ考えており、それ以外のことには無頓着である。言い換えれば、詩作に関することであれば、決して看過しないのである。2幕7場で酔っぱらいの植字工がしたミス、ナドメンは逐一発見していく。「まるでロシア人ではなく、タタール人が植字したようだ...／無数の過ちがある...どうしても理解できない...」と忌々し気な笑みを浮かべて、植字工を貶す。しかし、植字工は、6場の独白で「おれはナドメンじゃないが、もっとましな韻を踏めるぞ」と述べており、ナドメンの詩作のクオリティは素人目に見て低いものであることが仄めかされる。ここで、ルキンのサマフヴァーロフとナドメンが同一の人物をモデルとしたものであることが推察できる。

自身の作品に絶対の自信を持っており、文学に対して一家言を持っているナドメンの人物像が明瞭に描写されているのが、3幕4場である。チェスナドゥームが悲劇を手にもつたナドメンのもとを訪れる場面で、ナドメンは悲劇を一瞥もせず、床に投げ捨て、呪詛の言葉を吐き捨てる。この場面で非常に興味深いのは、ナドメンの他の作家への評価である。読んでもいない悲劇を酷評したのち、ナドメンは激昂し始め、最終的に悲劇を持ってきたチェスナドゥームに「自己愛よ！無知な厚かましきめ！」と叫ぶ。周囲の人間にとってナドメンこそが思いあがった詩人であったが、ナドメンにとっては彼らこそが「思いあがった詩人」

なのだ。ナドメンのこの思い上がりがよく分かるのが、3幕5場の独白である。

他人を愚かにするために道を切り開く！  
偉大な芸術を歪める！  
神々の言葉を貶める…想像…感性…！  
何のために？死んでも治らない馬鹿に囲まれるため、  
印刷された行にあらゆる愚かさを詰め込むために！  
もう十分だ、彼らはそれを感じてもない、  
それによって馬鹿の仲間入りをしてしまうのだと。  
傲慢になり、自分たちを過大評価し、  
こう思うのだ：ラシーヌ、コルネイユ、私、ヴォルテール—  
彼らに勝っているわけもなく、彼らより輝かしいわけでもなく  
しかし、あたかも私たちの作品が彼らと同等であるかのように。  
ああ、淪落…！墮落した人々だ！  
どこにいこうと—作家は不具者なのだ！  
誰もが創作者と思われたい、誰もが目立ちたい  
そして、最も愚かなことに、詩の中で私と比肩したいのだ！  
しかし、どれはあり得るのか？虚しくはないのか、  
わしの前で口を開けもしないやつが、  
わしの詩を理解もできないやつが、  
自分の悲劇と比べるのが私にとって何の役に立つ？  
しかし、何を言えばいいのだ！腐敗した時代よ！  
愚か者は皆、詩作で嘘をつこうとしている。  
政府はこのことについて何も考えていない。

留意したいのは、「虚しくはないのか／わしの前で口を開けもしないやつが／わしの詩を理解もできないやつが／自分の悲劇と比べるのが私にとって何の役に立つ？」という台詞である。つまり、文芸の第一人者であると自負しているナドメンを前にして詩を発表してもいないのに、彼の与り知らぬところで作品を発表し、高慢になる作家がいることに憤慨しているのである。ここで、ルキンの喜劇『小間物商人』や『愛によって心を入れ替えた道楽者』の序文で登場したサマフヴァーロフとの類似性が読み取れるだろう。ナドメンもサマフヴァーロフも、自身の作品への過度な自身から他者の作品を認めない傲慢な性格をしており、彼らの観点からすると、他の作家こそ傲慢なのである。

しかし、この2人の劇人物にもいくつかの相違はある。サマフヴァーロフは外国の偉大な作家と自身を同列と見なし、他者を貶めているが、ナドメンは、

外国の作家と自身を同一視する作家たちに憤慨している。このような相違がどこから生じたのか、当時のスマローコフに対する評価、スマローコフの自信と周囲への評価を書簡から検討していく中で明らかになることだろう。

#### 4. 書簡から見るスマローコフの人物像

##### 4.1 スマローコフから見た同時代の喜劇作家

スマローコフは、他のロシア人劇作家をどのように認識していたのだろうか。スマローコフは、1764年5月3日にエカテリーナ二世に宛てて書いた手紙が、それを最も如実に示している。

つまり、とても必要とされているのは、この私の模倣者と告発された盗人がシエヴェルソンの劇場から罷免されることなのです、もし私が演劇関連に役立つのならですが、私の劇を除けば、ロシアには喜劇も悲劇も今後100年は現れないでしょうし、我々の気質に合わせた翻訳喜劇も流行りはしません、ロシア劇場への名誉もちっぽけなものです、我々が翻訳喜劇だけを演じるだなんて、しかもしみつたれた翻訳家のものを<sup>16</sup>。

П. В. ステパーノフは上記の手紙の内容に注を付けており、この翻訳喜劇の評価は、当時のエラーギン一派に属していたルキン、フォンヴィージン、エリチャニーノフなどに対してのものである可能性を指摘している<sup>17</sup>。

この手紙は、ルキンの『愛によって心を入れ替えた道楽者』を「デトゥーシユ氏の放蕩者のひどい翻訳」とみなしていたサマフヴァーロフという人物が、スマローコフであったという事実を裏付けるものである。エカテリーナ二世に宛てた手紙の内容をなぜルキンが知っていたのか確認することはできない。しかし、後述する「スマローコフ宛の匿名の手紙」において、スマローコフがその激情的で高慢な性格ゆえに他者への中傷を広めていたことを鑑みれば、彼が女帝への手紙の内容と同じ話を周囲にしていたとしても、不思議はないだろう。

##### 4.2 同時代の作家によるスマローコフの評価

では、他の作家たちを軽視していたスマローコフ、および、彼の作品はどのように認識されていたのだろうか。

А. П. シュヴァロフによる『ある青年ロシア人貴族から\*\*\*氏に宛てた手紙』Письмо молодого русского вельможи к \*\*\* (1760)では、ロモノーソフの文学における功績に続いて、スマローコフについても言及されている。

<sup>16</sup> Письма русских писателей XVIII века. Л., Наука, 1980. С.97

<sup>17</sup> Там же. С.196

スマローコフはというと、彼は全く異なる演劇という分野において際立っている。彼は初めてこのジャンルの美を我々に開いたのだ。創作の才能は無かったが、彼は巧みに模倣することができた。コルネイユに及ぶことはできなかったが、彼がモデルに選んだのはラシーヌであった。彼の快活な想像力は、乾いた表現によって補われていた。彼の全てのプロットは繊弱である。彼は愛をこれ以上ないほど敏感に熟慮していた。彼はこの感情を繊細優雅に表現した。彼が描き出した感情は、驚かざるを得ないほど誠実で、その修飾は自然から採られたのだと思われた。これは、愛のルーベンスである。彼の作品全体を感傷が支配し、感情が溢れかえり、甘いハーモニーが彩った。

しかし、自身のモデルの欠点すら模倣したこと、悪習までも模倣したこと、自身の悲劇の中心に愛を据えたこと、余計なエピソードを入れ過ぎて、細かい話で悲劇を台無しにしたことで、彼は非難されることもある。

シュヴァロフの『手紙』は、上流貴族に庇護されたロモノーソフと中流貴族からの尊敬を集めたスマローコフという2つの派閥を念頭に書かれたものであるとベルコフは述べている<sup>18</sup>。シュヴァロフが上流貴族に属していたため、スマローコフの劇作と詩に関する「創作の才能は無かったが、彼は巧みに模倣することができた」と評したのである。とはいえ、フランスを含めた西欧演劇から諸要素を借用したスマローコフの喜劇においてもこの評価は合致する。「文学は自らの剽窃の独創性でしか生きられない<sup>19</sup>」とするならば、スマローコフ喜劇の特徴とは模倣によるものであった。

スマローコフへの批判は、『スマローコフ宛の匿名の手紙』 Письмо неизвестного к А. П. Сумарокову. (1769) でも述べられている。この手紙は1760年代後半に、スマローコフの事情に詳しい人物が匿名で書いたものである。この手紙に関する T. C. チホヌラーヴォフの解説には、「アレクサンドル・ペトローヴィチ・スマローコフ／当時の彼の評価」という題名が付いている<sup>20</sup>。

この手紙の中では、スマローコフがロシア文学で果たした役割と、その功績がかすんでしまうほどの激情的な性格が記されている。「あなたが、ヴォルテール、コルネイユ、シェイクスピア、その他偉大なギリシャの作家を剽窃し、あ

<sup>18</sup> Берков. П. Н. Неиспользованные материалы для истории русской литературы XVIII века. / XVIII век. Сборник статей и материалов. Сб. 1. — М., Л.: АН СССР, 1935. С.355-356

<sup>19</sup> ジャン＝リュック・エニグ著、尾河直哉訳『剽窃の弁明』現代思潮新社、33ページ

<sup>20</sup> Тихонравов Н. С. Александр Петрович Сумароков. Современная его характеристика // Русская старина, Т. 41, № 3, 1884, С. 609-618.

なたの思考を自身の作品に入れたがゆえに、あなたには然るべき尊敬が向けられ、我々の地で最初の詩人と呼んでいるのです。私は賛成もしましょう、あなたの作品が我々の祖国に少なからぬ名声をもたらしていることに」と彼がロシアにもたらした栄誉を認めながらも、それ以外の箇所は、彼の狷介で激情的な性格を激しく糾弾している。

上記の二つの手紙に共通しているのは、スマローコフが外国の文学や演劇を模倣・剽窃したという点である。『ある青年ロシア人貴族から\*\*\*氏に宛てた手紙』では、その模倣の巧みさと欠点について言及されているが、「スマローコフ宛の匿名の手紙」では、外国作家の作品を剽窃したと非難されている。しかも、ただ剽窃するのではなく、スマローコフの「思考を自身の作品に入れた」、つまり、外国文学の模倣をあたかも自身の作品であるかのようにして発表し、その名声すらも剽窃しようとしたのである。

自身が外国の作家と同列であるとするスマローコフの姿勢は、エカテリーナ二世宛の手紙の中で語られている。

#### 1767年10月—39

私は、皆がほとんどしないほど大らかな気持ちで彼らと分かち合い、私自身も自分に対して働き、ほとんど人間愛を超越した礼儀を示しています、これを彼らはモスクワ中で正しく広めているのです。感謝の気持ちとして、私は何よりも平穏と、祖国の栄誉のために創作するための時間を失ってしまいました、なぜなら誰も異議を唱えることはできないからです、勝利の武器にも劣らぬほど、ラシーヌ、ラ・ブリュイエール、ド・ラ・フォンテーヌがフランスの名誉とルイ治世の名誉を高めたということに。この自賛は、ヨーロッパの全学者、全てのアカデミーと大学が主張していることです。数少ない作品の悪評から判断するに、ドイツ、フランス、パリ、そしてメタスタジオと不可分であったヴォルテール自身も、私の同時代人からしてみれば私にふさわしい競争相手なのです。

このように、スマローコフは外国文学を模倣（剽窃）し、自身を外国の作家と比肩するロシア詩壇の第一人者という名声が妥当なものであると自身では考えていた。加えて、他の作家たちに対して辛辣な評価を下していた。一方、同時代人は、彼の作品が模倣であることを看破し、批判していたのである。

### 4.3 女帝へのスマローコフの釈明と窮状の訴え

当然のことだが、激情的で高慢なスマローコフへの悪口や悪評は広がり続けており、スマローコフ自身もこの問題に関しては危機感を覚えていた。上記の

シュヴァロフの手紙に関して、スマローコフは1770年2月25日のエカテリーナ二世宛の手紙の中で釈明している。

アンドレイ・ペトローヴィチはヨーロッパ全土で様々な場所で私を悪罵しました。なんと私について「ラシーヌの欠陥の愚かな模倣者」と書き、脚注において私の名前をロシアを褒め称える頌詩に入れたのです。

文人としての自分を誇りに思っていたスマローコフは、自身が模倣者と呼ばれた事実には憤慨しつつ、劇壇での自身の立場を巡るサルティコフとの論争<sup>21</sup>について釈明する。その中でも、同手紙の追伸の中で、自身の名声が失われつつある現状を嘆いている。

私は、パルナスへと思いを馳せ、不実なしには生き抜くことなどできぬ環境にしながら、残すことになるのは、貧困、借金、裸の栄光なのです、（この裸の栄光は）私の遺灰が棺の中で感じることができず、子孫代々私の名前を栄誉とするでしょう、もし侯爵殿下の慈悲によって私に悔しさをもたらしてくれるなら。

スマローコフは、作家としての自分を過大に評価し、他の作家を軽視していたがゆえに、演劇界から追放状態になり、エカテリーナ二世に釈明をすることとなったのである。自身が陥った厳しい状況について、スマローコフ自身も『訴願』 Жалоба<sup>22</sup>の中で嘆いている。

他者との軋轢で追いつめられるまで、スマローコフは自身を西欧の大家と比肩すると自負していた。しかし、その狷介と尊大な性格と、作品における模倣ゆえに、周囲からの評価と信頼を失っていき、スマローコフは最終的に貧困の中で消えていった。

この人生の栄光と転落から連想されるのは、クルーシンの『錬金術師』における画家スゴレピヤーフである。

## 5. 『錬金術師』におけるスゴレピヤーフ：スコロドゥーモフとスマローコフ

自らの錬金術を完成させて、友人の鼻を明かしてやろうと考えている錬金術師フスキピャーチリンのもとには次々と客人が訪れる。武勲を第一にする軍人ルバーキン、手癖が悪いが口の上手い下僕クリスピ、迫る老婆から身を隠すラズギリヂャーフ、若い男を追いかけ回すヴェトハクラソフ、自身の過去

<sup>21</sup> この論争については、エカテリーナ二世に宛てた1770年1月28日のスマローコフの手紙が詳しい。

<sup>22</sup> Сумароков А. П. Избранные произведения. Л.: Советский писатель. 1957. С.303-304

の栄光に縋って酒に逃げる画家スゴレピヤーノフ、錬金術を目の敵にする医者スメルトーダフらである。最後の医者が変装を解くことで、これまでやって来た全員が実はフスキピヤーチリンの友人で会ったことが明らかになる。

ここで登場する画家スゴレピヤーノフは、自身がアルコールに溺れるようになった経緯について、10場で次のように語る。

スゴレピヤーノフ：なんと！もしお望みでしたら、話してあげましょう、私が酔っ払いになった理由をね、イギリス、イタリア、フランス、文字通り全世界で私は正当に認められ、私の芸術を正しく評価してくれて、私はアペレス、ラファエロ、ルーベンスにも劣らないと言ってくれていたんだ、これらの人名を君は知らなくても結構だよ：ところがここ来ると、私は言われるのだ、ちゃんとしたスケッチもができないと；そうすると、当然、飲むしかない；そして、私は酔っ払いになったのだ。どうだい、私が君にも何か描いてあげようか？〈中略〉

スゴレピヤーノフ：まさにそれが無いのだ。それがあれば、私は、君が今見ているような人間ではなかったのに；ここにある外国人がやって来ている、しかも彼が素晴らしい画家でもなければ、筆も手に取ったことがない。私は彼のもとに弟子入りさせられたのだ。どうすれば、偉大な人が無学者の弟子になると？そして、私はもっと飲むようになったのだ。

スゴレピヤーノフ（熱くなって）：なんだって？芸術のパトロンを探す？ああ！私の心は裂けてしまう。思いもしなかったよ、君が私をそんな卑劣漢とみなしていたなんて；パトロンを探させておけばいい、パトロン抜きではいきられないやつにはね、相応しい人間のパトロンだけに価値があるんだ。<sup>23</sup>

このスゴレピヤーノフの直接的なモデルは、版画家Г. И. スコロドゥーモフ(1755-1792)である。彼は、芸術アカデミーを優秀な成績で修了し、渡ったイギリスにおいて版画家として大きな成功を収める。国王ジョージ3世の慰留があったが、スコロドゥーモフはロシアのペテルブルクへと帰還したが、ロシア国内での評判はあまり芳しくなく、晩年は飲酒に耽っていたという。

И. А. クルィロフの『精霊通信 Почта духов』(1789)におけるトゥルダリューボフが、スコロドゥーモフのことであるとベルコフは指摘している。以下は、『精霊通信』の11通目におけるトゥルダリューボフの台詞である。

私はといえば—トゥルドリューボフ—は言った—私の祖国での身分の利

<sup>23</sup> Русская комедия и комическая опера XVIII века. — М.—Л. : Искусство, 1950. С. 478-479



益を守るよりも、何よりもまずそれを置き去りにして、イギリスへ戻ろうとしました、そこでは、私の芸術をより高く評価してくれ、芸術に対してはここよりも百倍も支払ってくれるのです、私は自分の芸術に一切の違いはないと思うのだがね、これは私を悲しませたのです、一切考えもせず、私が酒に溺れてしまうほどに。理性的な人には許しがたいことだと知っていますが、一体どうしたらよいのでしょうか、私は素早く考え(скоро думав)、今や完全な酒飲みになってしまった私に。そして、この素速さは私一人だけではなく、多くの人に害をもたらすものだと知られています。だから、親愛なるプルタレズ、息子さんを何か芸術で喜ばせたいのなら、外国で仕事させるために送り出すか、何かをさせようと命じないでください、なぜなら、この住民は芸術家とその作品を何とも思っておらず、海外製のもののみを愛しているからです。私の芸術はいつも最良のものとみなされ、イギリスでは多くの人がこの芸術で裕福になりました。私自身も次第に、大金持ちの一人となっていたことでしょう、もしこちらへ戻らなくてもよかったのなら<sup>24</sup>。

スコロドゥーモフの人物像は、「芸術を高く評価するイギリスから、芸術に無理解なロシアへと帰還したために、酒に溺れるようになった画家」であり、これは確かにスゴレピヤーノフと同一のものである。

しかし、スゴレピヤーノフが「アペレス、ラファエロ、ルーベンスにも劣らない」「偉大な人が無学者の弟子となる」と自ら語る高慢さは、スコロドゥーモフの半生では説明がつかない。また、スゴレピヤーノフの愛国心、貧困に喘ぐ家庭状況、相応しいパトロン不在を嘆く姿などを考慮すると、スゴレピヤーノフには、スコロドゥーモフのみならず、スマローコフの特徴も内包していると考えられる。

自分が外国の作家と同等の評価を受けるに値すると考えていたスマローコフの高慢さは、トレジアコフスキーが画家アルヒソトラシュ・フィラフトノヴィチを作り出すきっかけとなった。そして、この戯画化された画家とスマローコフの人物像が、スゴレピヤーノフに影響を与えているのである。

スゴレピヤーノフは、続く場面で、自身の愛国心を語っている。

どうしてだ？ どうして？ 祖国に栄光をもたらさない者をそこに行かせておけばいい、私が栄光を手に入れたとして、栄光を汚し、家で餓死する

<sup>24</sup> Крылов Иван. Полное собрание сочинений в 3-х томах. Том 1. Проза С.73-74

ことを示すために、後に向こうへ行くことがあるだろうか。—君は分かるかね—いいや、私はそんなことをしないし、したくもない、不幸になり、祖国から祝福されながらも様々に誇るような人と同じなるといふ恩知らずになってまで、私が畜生で、馬鹿で、酔っ払いで、何の役にも立たないやつだとしても、私は祖国を愛しているのだ、祖国を敬愛しないぐらいなら、くたばり、溺れ死に、刺殺され、地面に埋められることを喜ぶほどに<sup>25</sup>。

もしクリョロフが『精霊通信』のトゥルダリユーボフのモデルにスコロドゥーモフを選び、クリョロフと親交の深かったクルーシンがこの画家を自身の喜劇に登場させたのであれば、このような愛国心は描写されなかつただろう。トゥルダリユーボフに愛国心がないと述べることでスコロドゥーモフの立場を案じたという可能性も、彼が1792年に亡くなっている点からして低い。この愛国心の高さは、祖国への忠誠を示しながら、その激情的な性格のゆえに最期まで報われなかつたスマローコフのものである。上記で引用した手紙でも、その他の手紙でも、スマローコフは祖国ロシアのための創作を願っている。

また、スゴレピヤーノフとスコロドゥーモフの相違、そして、スマローコフとの共通点は、家族構成と家庭環境にある。スコロドゥーモフに子供はいなかったが、スゴレピヤーノフには妻子がおり、芸術の対価が低いために貧しい生活を送っていると嘆いているのだ。

**フスキピヤーチリン**：幸せになるために、何をしようとお思いですか？

**スゴレピヤーノフ**：飲酒だよ。それでおしまいだ。私を束縛するのは、妻と子供たちだけだ。そう、私の子供、確かに、私の子だ。あの子らにはパンくず一欠片もないときもあるのです。—それゆえに、私はいつも酔っばらって、泣きもするのです！（感極まって泣く）。ああ！私はなんと哀れなんだ！可愛い、愛する子供たちよ！私はお前らに命を捧げ、血を流したい、だができない、私はよく自分に問いかけます、「役立たずで、惨めな酔っ払いめ、もう十分飲んだだろう」とね。悲しみが私を覆い、涙が川のように流れ、私はさらに酔っばらうのです<sup>26</sup>。

高慢さ、愛国心、貧困に喘ぐ妻子、資金援助の懇願、これらの要素全ては、スコロドゥーモフではなく、スマローコフに当てはまるものである。スマローコフは、1775年6月8日に、Г. А. ポチョムキンに宛てて、自身の切迫した状況

<sup>25</sup> Русская комедия и комическая опера XVIII века. — М.—Л. : Искусство, 1950. С. 479

<sup>26</sup> Там же. С. 480

を赤裸々に告白し、支援を懇願している。

私は、毎年6年にも亘って5月1日に受け取っている年給に関して、ご命令をしていただくというご迷惑を閣下におかけしております。私にとって、この年給は何よりも必要なのです。というのも、私は作品をサンクト・ペテルブルグで印刷し、こちらへきて間もないため、すっかりお金を使い果たしてしまっただけです、私がいないと家がすっかり零落してしまい、村では全てが焼けてしまいました。特に、私の養馬場と穀物庫は跡形もなく焼失しました。私はラズモフスキー伯爵のご慈悲で、最高の馬を持っていました。今ではモスクワに残してきた馬だけでなく、私の領民も私も何も口にできないのです。このような状態は死ぬより辛く、さらに、借金のために最後の食事がとれるかも脅かされています。君主の博愛と慈悲で助けられなければ、私は死んでしまうに違いありません。私が求めているのは給料で、それ以外は今は放置しておきます、家が奪われ、私がほとんど考えていない人生を失うときまで、もし残してきた私の子供たちが貧乏に震えてさえいなければ。これら全ての原因は、私が詩を愛していることです。なぜなら、私は文学に期待を寄せており、官位と名声よりも、ミューズに熱心に取り組んだからです。本はあまり残っておりませんが、今私が売ろうと考えているのは400巻、作品集150、例えばオペラ、喜劇、悲劇、その他小作品を含めてです。私のミューズをずっと養ってくれたこれらの本が、良い人の手に渡ることを祈っています。今週、これらを800ルーブルで売りに出しますので、ご検分を願えませんか？ また、これらの本はあなたの図書室に値するでしょうか？ 謹んでご報告申し上げます。私の手元には、イワン・シュヴァロフが旅立つ際に贈呈してくれたミニチュア肖像画があり、これは目にする価値のあるものとして彼の書斎に5年間飾られていました。見てはいただけないでしょうか？ また、エリザヴェータ・ペトローヴナ女帝に非常によく似た珍しい肖像画もあり、この肖像画からロシアに数千枚、いや、ほとんど全てのコピーが作られました。お返事をお待ちしております、請願にありました給金の件についてなにとぞお願い申し上げます。私自身、3ヶ月前から様々な病気に苦しみ、貧困とひどい環境にさらに苦しんでおります<sup>27</sup>。

クルーシンの『錬金術師』におけるスゴレピヤーノフは、当時の画家スコロドゥーモフをモデルとしたものであった。しかし、彼の高慢さ、愛国心、貧困

<sup>27</sup> Письма русских писателей XVIII века. Л., Наука, 1980. С.174

ゆえの悪環境といった諸要素は、スマローコフを例にとったものであると考えられる。トレジアコフスキーが、スマローコフを画家にみたてて嘲笑したその40年後、零落した画家と重ね合わせられる形でスマローコフは再び嘲笑の対象となったのである。

## 6. 結論にかえて

風刺喜劇として嘲笑する立場にいたはずのスマローコフは、時代が下るにつれて風刺の対象となっていった。本稿では、トレジアコフスキーの『手紙』、ルキンの『小間物商人』に始まり、ニコレフの『思いあがった詩人』、そして、クルーシンの『錬金術師』を検討してきた。

スマローコフは激情的で狷介な性格ゆえに不幸な人生を送ることとなったが、それと同時に彼が文壇で果たした功績も認められていた。そのため、古典主義喜劇から催涙喜劇へ移行した劇壇において、スマローコフは催涙喜劇の中心的な劇人物とするのに最適な人物であった。不幸に陥っていた高潔な人々が幸福となり、悪徳を有する人物が不幸へと転落する催涙喜劇の構造は、彼が文芸で名声を得たのち、自身の悪徳によって徐々に身をやつしていくスマローコフの人生そのものであった。嘲笑する側から嘲笑される側へ、そして、その後のロシア喜劇を形作る催涙喜劇の枠組みにおいて一つの典型となったのである。

トレジアコフスキーは傲慢な画家として、ルキンとニコレフは嫉妬深い詩人として、そして、クルーシンはこれら二つを合わせた傲慢かつ嫉妬深い画家として、スマローコフを喜劇的に嘲笑していたのである。ロシア演劇の創始者であるスマローコフがロシア演劇の登場人物となるという皮肉な運命であるが、スマローコフがそれほどまでにロシア演劇に浸透していたとも換言できるだろう。

## 参考文献

- XVIII век. Сборник статей и материалов. Сб. 1. — М., Л.: АН СССР, 1935.
- Абрамзон Т. Е. Александр Сумароков. История страстей: монография. — М.: ОГИ, 2015.
- Берков П. Н. История русской комедии XVIII в. — М. Л.: АН СССР, 1977.
- Берков П. Н. Ломоносов и литературная полемика его времени 1750-1765. — М., Л.: АН СССР, 1936.
- Гринберг, М. С., Успенский, Б. А. Литературная война Третьяковского и Сумарокова в 1740-х – начале 1750-х годов. *Russian Literature*, 31(2), 1992, С.133–271.

- Гуковский Г. А.* Русская литература XVIII века. — М.: Гос. учеб.-пед. изд-во Наркомпроса РСФСР, 1939.
- Крылов Иван.* Полное собрание сочинений в 3-х томах. Том 1. Проза. — М.: ОГИЗ, 1945.
- Лукин В. И., Ельчанинов Б. Е.* Сочинения и переводы Владимира Игнатъевича Лукина и Богдана Егоровича Ельчанинова. — СПб.: 1868.
- Письма русских писателей XVIII века. — Л.: Наука, 1980.
- Ранчин А. М., Коровин В. Л.* Критики XVIII века. — М.: Олимп, 2002.
- Русская комедия и комическая опера XVIII века. — М., Л.: Искусство, 1950.
- Стенник Ю. В.* Русская сатира XVIII века. — Л.: Наука, 1985.
- Стихотворная комедия конца XVIII – начала XIX века.: — М., Л.: Советский писатель. 1964.
- Сумароков А. П.* Избранные произведения. — Л.: Советский писатель, 1957.
- Тихонравов Н. С.* Александр Петрович Сумароков. Современная его характеристика // Русская старина, Т. 41, № 3, — СПб.: 1884, С. 609-618.
- ジャン=リュック・エニグ著、尾河直哉訳『剽窃の弁明』現代思潮新社。